

ため分割添加において初期に停滞現象が現れた。また酸化除去量も見掛け上 $Si \gg Nb > P$ となつた。

4) ニオブ、バナジウムの酸化挙動の比較において、 Na_2CO_3 、 $Na_2CO_3-Fe_2O_3$ および $CaO-CaF_2-Fe_2O_3$ 各フラックスによる酸化除去量が $Si \gg Nb > P$ 、 $Si \gg P > V$ であつたことから、本実験条件下では、それらの酸化除去量は $Si \gg Nb > P > V$ の順になると思われる。また脱りんを考えずに、脱珪および脱ニオブまたは脱バナジウムを得るには酸素吹きや酸化鉄の添加のみで十分であり、フラックスの添加は必要ではない。さらに予備脱珪を十分行い、酸化源の供給によつてスラグ-メタル界面の酸素ポテンシャルを高く保てば、フラックスの分割添加によつても脱りん、脱ニオブ、脱バナジウムが期待できる。

5) ニオブを含む鉄鉱石を高炉で処理してできる高シリコン高マンガン高りん溶銑に Fe_2O_3 を加えると脱珪

脱マンガン脱ニオブ反応が生じ、排滓せずに Na_2CO_3 を加えると脱珪反応は進行するが復マンガン復ニオブ反応がみられた。脱珪処理後の高りん高マンガン含ニオブ溶銑に Na_2CO_3 を多量に加えると脱珪脱ニオブ脱りん反応は起こるが脱マンガン反応は起こらなかつた。また復りん復ニオブ反応もほとんど起こらなかつた。

文 献

- 1) L. ZONGCAI, Z. RONGHANG, H. CONGJIA, L. H. HUANG YE, and W. YUANHAO: Iron Steel, 16 (1981) 6, p. 6
- 2) C. YONGDING, D. KAIWEN, and Q. GUOJUN: Iron Steel, 16 (1981) 5, p. 10
- 3) 井上 亮, 水渡英昭: 鉄と鋼, 69 (1983), p. 951
- 4) 井上 亮, 水渡英昭: 鉄と鋼, 65 (1979), p. 1838
- 5) 水渡英昭, 石坂 祥, 井上 亮, 高橋愛和: 65 (1979), p. 1848
- 6) R. A. GUSTISON and J. A. CENERAZZO: J. Metals, 23 (1971) 8, p. 45

コ ラ ム

Siitari San

昨春の講演大会で、身長 2m に近いのつぼの外人さんが比較的流ちょうな日本語で講演した事を御記憶の方がおられるであろう。彼 Dr. D. Siitari は、米国 National Steel 社の研究所から交換研究員として日本鋼管の技研に派遣され、その研究成果の一部を発表したものである。

33 Metal Producing 誌 July 1982, に日米鉄鋼技術の交流が "The Great Technology Swap" として特集されている。この中で、新しい技術交流の手段として研究員の交換が注目され、具体例として Dr. Siitari が紹介されている。

「技術交流の多くは、Meeting 型式であり、この場合は必要に応じ通訳をつける事も可能で、言葉はあまり障害にならない。しかし派けん研究員となると、言葉は必要不可欠である。Dr. Siitari は来日前約半年間日本語を特訓し Dave Siitari から Siitari San になつた。(Dave Siitari became Siitari San)」というくだりがある。事実彼は来日直後から私共と机を並べ、同じ作業衣を着用、工場弁当を箸を使つて食べるという積極的な態度で日本の研究所生活に入り込んで

来た。また会社外でも忘年会、新年会、グループ旅行等に常に参加し人間としてのふれあいを深めて行つた。

鉄鋼協会での講演は彼の研究生活にとつては一つのエポックであり、また満開の桜の下でのジュニアパーティーで多くの知己を得た事等、講演大会という場が、彼にとつて日本を理解するための大きな役割を果たしている。

国際化の時代、科学技術は経済にも国際関係にも無縁ではない。いろいろな局面での摩擦が問題になりました今後も問題になつて行くであろうが、これを解消するには、根底に人間として信頼感があるという事が必要ではなからうか。彼の様な人間が一つのかげ橋として相互の理解を深め本当の国際化に役立って行くであろう事を期待したい。

なお蛇足ではあるが、彼は一年間の在日中に「Siitari San」から更にすすんで「デーブさん」になり、離日の際には涙をうかべながら「さようなら」といつて成田を立つて行つた事および帰国後も日本語の勉強をし続けているという手紙が来た事をお伝えする。

(日本鋼管(株)技術研究所 原 富啓)